

2014.4.17
vol.31

シネマ・ド・りぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品

バグダッド・カフェ



ラスベガスとロサンゼルスを結ぶ道筋にあるモハヴェ砂漠のはずれ。そこにある、取り残された様な寂しげなモーテル“バグダッド・カフェ”きりもりしているのは黒人女のブレンダだ。

監督：パーシー・アドロン
主題歌：ジェヴェッタ・スティール
『コーリング・ユー』
出演：マリアンネ・ゼーゲブレヒト
ジャック・パランス
CCH・パウンダー
製作：1987年 西ドイツ カラー
上映時間：91分

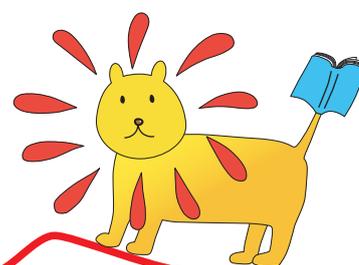


監督P・アドロンが、「シュガーベイビー」に続き、女優M・ゼーゲブレヒトと組んで創った、砂漠に芽生えた女と女の友情の物語。アメリカ、ラスベガスとロサンゼルスを結ぶ道筋にあるモハヴェ砂漠のはずれ。そこにある、取り残された様な寂しげなモーテル“バグダッド・カフェ”。ここをきりもりしているのは黒人女のブレンダだ。役に立たない夫、自分勝手な子供達、使用人、モーテルに居着いた住人たちにまで彼女はいつも腹を立てていた。そんなある日、ひとりの太ったドイツ女がやって来た。彼女の名はジャスミン。大きなトランクを抱え、スーツを着込み、砂埃の道をハイヒールで歩いてきたこの奇妙な客に、ブレンダは不快な表情を隠そうともしなかった。だが、この彼女の登場が、やがてさびれたカフェを砂漠の中のオアシスに変えてゆく……。



会場が明るくなるまで、
席を立たないようにお願いします。

上映会には、公共の交通機関を利用するか、乗り合わせてお出かけ下さい。



りぶらいおん©LSC

映画を読む

『バグダッド・カフェ』

変なオバさんがやってきて、みんながちょっとだけ幸せになる物語 K.M.

今回上映の作品は、「登場人物の誰かにつよく共感したり」とか、「迫力のある映像に魅せられたり」とか、「観るとみるみる元気になる」とか、そういう映画ではありません。淡々と話が進んでゆくにつれ、段々と引き寄せられ、のめり込んでいき、最後は不思議と心が温められている、そういった作品です。

日本では1989年にシネマライズで初公開されて大ヒットし、当時のミニシアターブームを代表する一作となりました。その後も幾度となくリバイバル上映され、TSUTAYA 企画の『100人の映画通が選んだ本当に面白い映画』に組み入れられたりして、未だに新しいファンを増やしている伝説的な作品です。ジェヴェッタ・スティールが歌う主題歌“コーリング・ユー”は、アカデミー最優秀主題歌賞にノミネートされ、80組を超えるアーティストがカバーするヒット曲となり、今も歌い継がれる名曲となっています。

今回の上映作品について、シネマ・ド・リぶらのお客様は、あまり情報をお持ちではないかもしれないので、メインキャストについての情報を少しだけ補足しておきます。

<マリアンネ・ゼーゲブレヒト>

【突如バグダッド・カフェに現れ、住み付くドイツ人のオバさん「ジャスミン」役】

1945年8月27日生れのドイツ・バイエルン州出身の女優。『バグダッド・カフェ』の世界的大ヒット以来、国際的に活躍中。1992年にはドイツ・フランス合作の「Martha et Moi」でヴェネチア映画祭の最優秀女優賞を受賞。先月、最新作『バチカンで逢いましょう』を携え初来日し、3月25日、東京・赤坂のドイツ文化会館センターで行われたイベントに登場。「『バグダッド・カフェ』から何年もたって、新しい映画と共にお目見えできることをうれしく思います」と笑顔で挨拶。『バチカンで逢いましょう』は4月26日公開予定。

<CCH・パウンダー>

【当初「ジャスミン」を敵視するが、やがて心を開くバグダッド・カフェの女主人「ブレンダ」役】

1952年12月25日生まれのカリフォルニア系アメリカ人女優。イギリスで教育を受け、1979年に映画『オール・ザット・ジャズ』でデビュー。87年の『バグダッド・カフェ』のブレンダ役で大役に抜擢され、以後多才な脇役として映画・TVで多数の作品で活躍。歴代1位の世界興行収入を記録した『アバター（2009 & 2010）』では、ヒロインのネイティリの母親の巫女役を演じた。

<ジャック・パランス>

【トレーラーハウスに住み、毎日カフェに顔を出す、ハリウッドからやってきたバンダナの似合うジイさん「コックス」役】

1919年2月18日生まれのパンシルベニア州出身の俳優。両親はウクライナからの移民。1950年にエリア・カザン監督に認められ『暗黒の恐怖』で映画デビュー。1953年『シェーン』で冷酷無残な薄ら笑いを浮かべる殺し屋ウィルソンを演じて一躍有名になり、以後独特のマスクと長身を活かして多くの作品で活躍。1991年の『シティ・スリッカーズ』でアカデミー助演賞を受賞。2006年11月10日、老衰のためカリフォルニア州の自宅で死去。享年87歳。

<クリスティーネ・カウフマン>

【バグダッド・カフェに長期滞在している一匹狼の刺青彫師「デビー」役】

1945年1月11日生まれのアーストリア・シュタイアーマルク州出身のドイツ人女優。7歳のときから映画に始まり1958年『幼な心』で主演。清純派美少女スターとして絶大な人気を誇り、1961年の第18回ゴールデングローブ最優秀新人賞授賞してハリウッドに進出。『隊長ブーリバ』で共演のアメリカの俳優トニー・カーティスと18歳の若さで結婚。1968年離婚後、女優に復帰し、映画、TV、舞台で活躍。自分のコスメティック・ブランドを持ち「ドイツで最も美しいおばあさん」と言われているそうです。

ミニシアターは、日本の映画館のうち、ブロックブッキング（映画館と映画配給会社との間で結ぶフィルム貸借契約のうち、映画館が特定の配給会社の作品だけを上映することを内容とするもの）などによる、大手映画会社の直接の影響下にない独立的なものを指す呼称です。規模が小さく、座席数300以下のものをいう場合が多く、単館劇場ともいいます。

1968年に設立された岩波ホールの総支配人だった高野悦子と、彼女を支えた東宝東和の川喜多かしこが、1974年にエキブ・ド・シネマ（フランス語で「映画の仲間」の意）をスタートし、ロードショー公開されない世界中の良作を上映する運動を始めたことがミニシアターの始まりだそうです。1980年代中盤にヌーヴェルヴァーグの作品群や『ニュー・シネマ・パラダイス』『ベルリン・天使の詩』などのヨーロッパ映画を上映することで、ミニシアターブームと呼ばれる現象が生まれました。

岡崎には、現在「イオンシネマ」と「シネプレックス岡崎」の2館の映画館がありますが、どちらも大手のシネコンで、上映作品が重なっている場合も多く、それ以外の上質なドラマ的な映画を見たいと思うと、名古屋の「名演小劇場」や「伏見ミリオン座」まで出かけていくこともしばしばあります。今年アカデミー賞の作品賞を取った作品も、案外シネコンでの上映がない場合も多いのです。

『バグダッド・カフェ』

——なぜ、“バグダッド”なのか？

<http://ameblo.jp/nirenoya/entry-10427879638.html>

「げたにれの“日日は言語学”」から抜粋

バグダッドは1900～1910年のあいだは、金鉱を経営する「オレンジ・ブロッサム・マイン」の城下町として繁栄しましたが1918年に大火があり、ほとんど

の建物が焼失してから町の凋落（ちょうらく）が始まり、1930年代末には数棟の建物しか残っていなかった、と言います。

撮影が行われたのは、バグダッドからバーストリーに向かって4つ目の町、ニューベリー・スプリングスでした。ロケに使われたのは「サイドワインダー・カフェ」the Sidewinder Cafe という実際に営業しているカフェでした。この映画がヒットしたあとで、Sidewinder Cafe は、名前を Bagdad Café と変えて営業しているようです。

ニューベリー・スプリングスは、今でも、4,000人の人口をかかえる、ゴーストタウンになることを免れた町です。その町で、Route 66に面したのがこのカフェでした。もっとも、映画で見るとおり、店の後ろは新道の Interstate 40 です。この店は旧道と新道に挟まれたハマの土地に建っているんです。

ペルシー・アドロン監督は1980年代当時、奥さんとともに、たびたび米国中をクルマで旅していたそうです。当時のインタビューでは、役者としてロサンゼルスで亡くなった伯父さんに関する映画 “Louis with a Star” を撮りたい、と話していたようで、彼がアメリカに惹かれたのも、亡き伯父さんの記憶のせいかもしれません。

1985年（昭和60年）のクリスマス、アドロン一家が、あの映画の舞台となったあたりをクルマで旅行している際に、地図に Bagdad という地名を見つけました。しかし、いくらその町を探しても見つからなかった。もちろん、すでに廃墟になっていたからです。

そのあとで、立ち寄った“サイドワインダー・カフェ”に、あの映画の絶好のセッティングを見出したのでした。つまり、旅行者として、偶然、映画のタネを見つけてしまったんですね。しかし、単なる偶然とも言えないのかもしれません。

生まれ故郷のドイツをあとにして、単身、ハリウッドに渡り、“アドロン公爵”を名乗りながら、短い生涯に30本の映画に端役として出て、名を成さずに終わってしまった伯父さんが、彼を呼び寄せたのかもしれないですね。



『ミニシアター巡礼』	代島 治彦／著	大月書店	778.09
『ミニシアターフライヤーコレクション』		ピエ・ブックス	778.2
『ミニシアターフライヤーコレクション2』		ピエ・ブックス	778.2
『ミニシアター・ガイド』		エスクァイアマガジンジャパン	778.09
『ミニシアターグラフィックS』		ピエ・ブックス	778.09
『ミニシアターグラフィックS2 単館映画のヒットを生み出す宣伝ツール特集』		ピエ・ブックス	778.09
『エキブ・ド・シネマの三十年』	高野 悦子／編	講談社	778.067

シネマ・ド・リぶら 次回上映会のご案内

vol.
32

舞踏会の手帖



6月19日(木)

① 10:30 ~ 12:40

② 14:00 ~ 16:10

『モンパルナスの夜』などで知られる巨匠、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督による名作ドラマ。昔の手帖を見つけた未亡人の女性が、社交界デビューを飾った夜に相手をしてくれたダンスパートナーたちの今を訪ね歩く。

監督 ジュリアン・デュヴィヴィエ
出演 マリー・ベル
フランソワーズ・ロゼー
音楽 モーリス・ジョベール
製作 1937年 フランス
上映時間 144分

『舞踏会の手帖』テーマ展示

- ◆ 6月12日(木) ~ 6月24日(火)
- ◆ 場所：ポピュラーライブラリー

当日は「サロン・ド・シネマ」に替え、災害時の避難についてご案内します。開場後は、お席に着いてお待ち下さい。

特別上映会のご案内 (入場料 1,000円)

8月21日(木) 『じんじん』

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:00 ~

企画・主演：大地康雄 監督：山田大樹
絵本の里を舞台に描かれる親子の絆の物語。

チケット販売の協力者を募集しています。
スタッフまでお申し出下さい。
試写会のご案内を送付させていただきます。

今後の上映予定 (毎回木曜日)

9月18日 『嵐が丘』

10月16日 『英国王のスピーチ』

12月18日 『武器よさらば』

1月15日 『死刑台のエレベーター』

2月19日 『フラガール』

※開催日および上映作品は、変更になる場合があります。

「シネマ・ド・リぶら」の賛助サポーター
受付中！ 年間：1口 2,000円から

託児：500円 (各回6名まで)
申込みは、1週間前までに
市民活動センターへ。

図書館のDVD資料だけでは、無料で上映できる作品が限られています。あなたの賛助で、上映作品の幅が広がります。登録は市民活動センターへ。相談窓口：戸松 090-6574-3312